

国立国語研究所学術情報リポジトリ

北見市常呂町岐阜方言に見られる世代差

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道方言研究会 公開日: 2025-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝日, 祥之 メールアドレス: 所属:
URL	https://repository.ninjal.ac.jp/records/2000499

北見市常呂町岐阜方言に見られる世代差ⁱ

朝日祥之
国立国語研究所

0. はじめに

発表者は、2013 年より北見市常呂町岐阜地区の居住者を対象とした調査研究を実施している（朝日 2021、Asahi 2015 ほか）。本研究会においても、第 209 回、第 225 回、第 233 回の例会でその成果の一部について報告してきた（朝日 2014、2020）。本発表では、これまでの報告でも取り上げた資料を用い、北見市常呂町岐阜地区居住者（第一世代から第三世代）による方言使用に見られる世代差について考察する。

以下では、1 節で北見市常呂町の概要を示し、2 節で分析に用いた資料を紹介する。3 節で分析の対象となる言語変数を示し、4 節で分析を行う。5 節で本発表のまとめと今後の課題を述べる。

1. 常呂町の概要

常呂町はもともと網走支庁管内の町だったが、2006 年の市町村合併により北見市に編入された。常呂町は 1883 年に開基され、各地からの移住者によって町が形成された。2020 年時点では常呂町の人口は 3,553 人である。常呂町には 19 の地区があるが、本研究が対象とする岐阜地区は常呂町全体の地区の中でも古くからある地区の一つであり、現在でも人口の多い地区である。人口は 2015 年時点で 321 人である。なお、当地区にある土佐地区は岐阜と同じく古い地区であるが、高知県佐川町からの入植者で構成される。当地区的小原友徳氏が佐川町特別名誉町民の授与がなされていることに確認できる。



図 1 北見市常呂町岐阜地区（発表者撮影）

2. 本発表で用いる資料

本発表では以下に示す資料を用いる。

(1) 1970 年代・1980 年代に常呂町で実施された調査データ

北海道教育大学旭川分校国語学ゼミナール（1980）における調査、常呂町教育委員会による聞き取り

(2) 1983 年代に現地で収集された口述資料の書き起こし資料

林不二夫（編）（2002）『常呂町の昔話 2』常呂町郷土研究同好会

- ・岐阜地区の話者（3 名、共に明治 30 年代の生まれ）による口述資料（「岐阜団体入植の頃の四方山話」）（音声資料の所在は不明）

「美濃弁を何らかの形で残したいと思っていましたので、3 人の話に手を加えず、そのまま忠実にかいたつもりです」（p.1）

(3) 2013 年に発表者が実施した常呂町岐阜地区居住者への聞き取り音声資料

- (1) は 44 時間分、(3) は 1 時間分の録音資料について書き起こしを行い、そこに出る資料、(2) については『常呂町の昔話』本文をテキストに起こしたものと資料としてそれぞれ用いた。

分析対象となる話者を生年により 3 つの世代に分けることとした。

- (1) 第一世代：1890 年以前に生まれた世代
- (2) 第二世代：1910 年以前に生まれた世代
- (3) 第三世代：1940 年以前に生まれた世代

本発表では、これらの世代による言語使用に見られる差異を考察していく。なお、世代の認定については、各話者のライフヒストリーによる口述内容をもとに行う必要性がある。だが、本発表では、当地で発生した言語変化の過程をより的確に捉えることを目指し、話者の生年代による世代認定を行った。

3. 分析に用いる言語変数

本節では、本研究会第 233 回例会発表により北見市常呂町岐阜方言における特徴を示した。そこから、当該方言の郷里方言である岐阜県の美濃方言に見られる特徴を踏まえ、本発表では、(1) 否定辞、(2) アスペクトを分析とする。分析に入る前にその特徴を第 233 回例会の資料を再掲する。

3. 1. 否定辞

常呂町岐阜方言の否定辞は動詞では「ン」形容詞・形容名詞・名詞で「(ジャ) ナイ」である。また、朝日(2021)では、否定辞に関わる活用形として以下を挙げている。

断定過去・連体過去形 ミンカッタ、ミナンダ 推量 ミンジャロー

中止形 ミンデ 仮定形 ミンカッタラ、ミナンダラ

本発表では、これらのうち、動詞に接続する否定辞を分析の対象とする。以下、例文の一部を示す。

- (1) そうじゃろう、うちの敏も蛇をおそがらんで、ちょいと掴んでターアと横の方に投げていったもんだ。（1983_tokoro_gifu_001_9 ヘンビ（蛇）の話_0031）
- (2) モンペを何で習わんかったんじゃろう。（1983_tokoro_gifu_001_15 モンペの話_0003）

- (3) 一回お金を集めに回ったけど集まらなんだ。 (1983_tokoro_gifu_001_14-2 本堂建立の時の寄付の話_0004)
- (4) 薪ばかりどんどんくべて (燃やして) も焼けないから、最後は棺を叩いて割って、割らなんたら焼けないから、転がしながら焼いたもんだ。 (1983_tokoro_gifu_001_16 お墓について_0015)

これとは別に、否定辞「セン」「センカッタ」「セナンダ」も使われている。

- (5) ちょっとも履いたことはあらせん。 (1983_tokoro_gifu_001_15 モンペの話_0009)
- (6) おとっさんたは、ほとんど冬の間、子供の話はせんかったそうじや。
(1983_tokoro_gifu_001_2 奉公の話_0007)
- (7) そうじや、病院はあらせなんだから。 (1983_tokoro_gifu_001_1 入植当時の話_0060)

3.2. アスペクト

アスペクト形式を取り上げる。本研究会第 233 回例会発表から、継続として「トル」が使用されることを報告した。また、結果を表す場合も「トル」が用いられる。

- (8) 何にも言わっせなんだが、毎日おとっさんたも心配しとった。 (1983_tokoro_gifu_001_2 奉公の話_0010)
- (9) お婆さんたは、姉妹だから話しとったんだね。 (1983_tokoro_gifu_001_9 ヘンビ (蛇) の話_0045)
- (10) 何せ珍しかったわえ、親の言うままに結婚しとった頃じやから。
(1983_tokoro_gifu_001_13 差別用語の話_0002)
- (11) (その時には子供が) 生まれとったわな。子供は分からんが、親たちは分かってる。
(TKR79_026_A_Gifu_Watanabe_Watanabe-0219)

「ヨッタ」の使用も 1 例認められた。これは動作の習慣的な動作を表すものである。この用法は少なくとも名古屋市方言では使用されることは確認できている。この資料には非過去形は観察されない。

- (12) 梅がよう言いよったが、アサ婆さんの前の婆さんの時に、ああスミさといって、うちのお婆さんの妹だった。 (1983_tokoro_gifu_001_9 ヘンビ (蛇) の話_0038)

分析では、以上に示した変異形を「方言形」とし、それ以外の形式「ない」「ている／てる」を「非方言形」とみなした上で、それぞれの世代における使用実態を見ていく。

4. 分析

本節では、最初に分析に用いた資料から否定辞、アスペクトの方言形、非方言形の使用率から見る（図 2）。

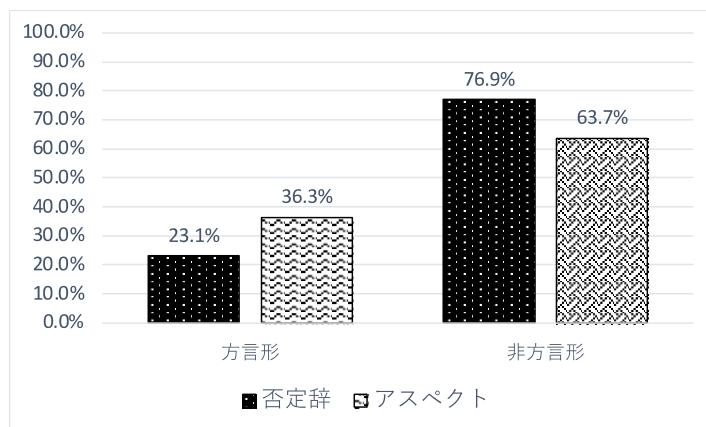


図 2 否定辞・アスペクトにおける方言形・非方言形使用率

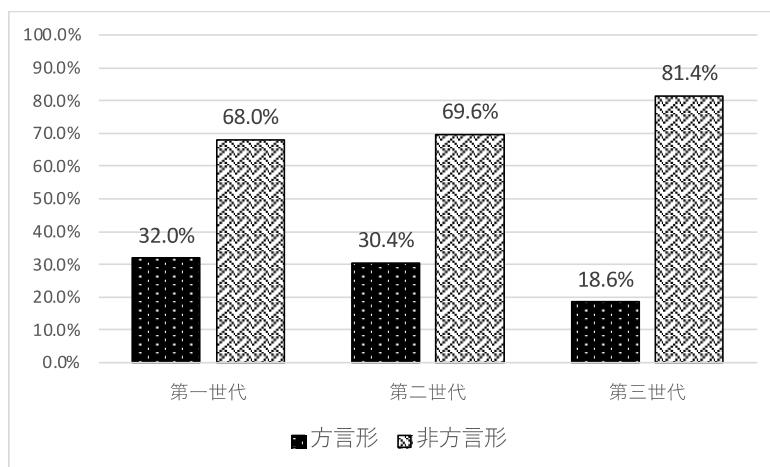


図 3 世代ごとに見る方言形・非方言形使用率

図 2 から、本資料に確認された方言形は、否定辞・アスペクトとともに、全体の 2 割から 3 割にとどまっている。北見市常呂町岐阜方言の美濃方言的に特徴が優勢ではないことが確認できる。これを話者の世代ごとに示した結果を見てみよう（図 3）。

図 3 から世代ごとに見ると、第一世代において、すでに郷里方言である方言形よりも非方言形をより多く使用することが確認できる。この傾向は第二世代、第三世代でも共通している。第一世代が北海道に移住してまもなく郷里の方言だけではなく、非方言形を使用する傾向が認められる一方、第二世代は第一世代とその使用率にほとんど変化は見られない一方で、第三世代になると、方言形率がさらに下がり、非方言形率が 8 割を超えるのである。常呂町に岐阜県から移住した第一世代は当地での言語生活の中で郷里方言以外の特徴を習得しつつも、方言形を第二世代まで維持させていることは興味深い。ただ、第二世代と第三世代の間では方言形・非方言形率に変動があることが言える。

では、本発表で取り上げる否定辞とアスペクトそれぞれの方言形の使用率はどうなのか。結果を図4、図5にそれぞれまとめた。

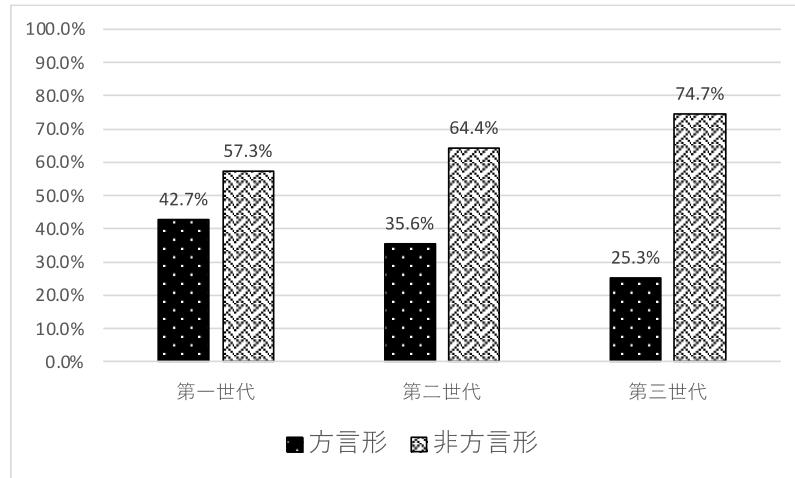


図4 否定辞における各世代の方言形・非方言形使用率

図4、図5から、否定辞、アスペクトにおける方言形、非方言形の使用率を世代ごとに示すと、それぞれに異なる傾向が認められる。具体的には、否定辞の方言形の使用率は第一世代において非方言形の使用率とほとんど変わらない一方、第二世代、第三世代になるにつれ、非方言形の使用率が高くなる傾向がある。

それに対し、アスペクトについては、第一世代において、非方言形の使用率はすでに8割近くになっている。この傾向は第二世代、第三世代にも当てはまる。第三世代になると、方言形の使用率が1割とかなり低くなっていることがわかる。

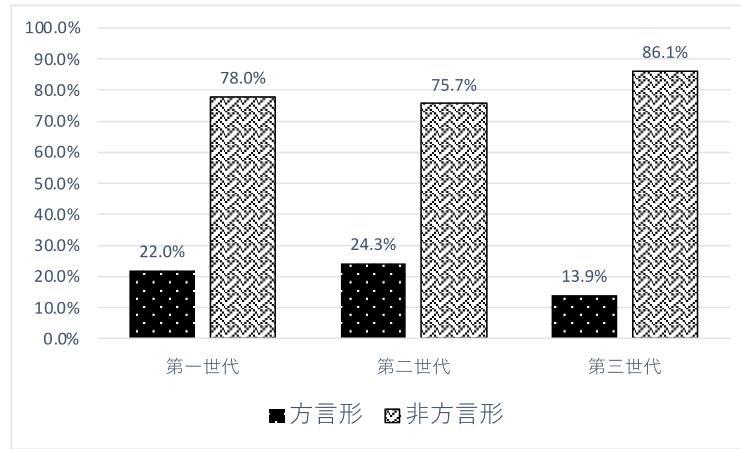


図5 アスペクトにおける各世代の方言形・非方言形使用率

ここから、否定辞の方が、その方言形を維持させる傾向がアスペクトよりも強い。北見市常呂町岐阜地区の住民にとって、郷里の方言としてより意識が強いのが否定辞であると考えられる。一般に関西地方の広い地域において、地域を代表する方言形式に否定辞が挙げられることが多いが、否定辞の方言形式は西日本の広い地域で使用される方言形であること

が、この結果につながった要因であるとも考えられる。それに対し、アスペクトにおいては、方言形式であった「トル系」の形式よりも非方言形式「テイル」を早い段階から使用するようになったと考えても良さそうである。

以下では、否定辞、アスペクトの方言形、非方言形の使用率を見ることにしたい。

(1) 否定辞

まず否定辞から見てみよう。ここでは、<非過去>と<過去>を表す場合の方言形の使用率を算出した(図6、図7)。

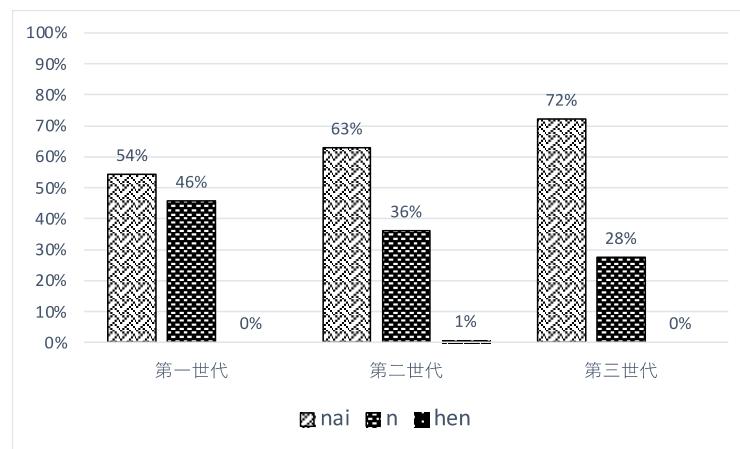


図6 否定辞<非過去>における各世代の方言形・非方言形使用率

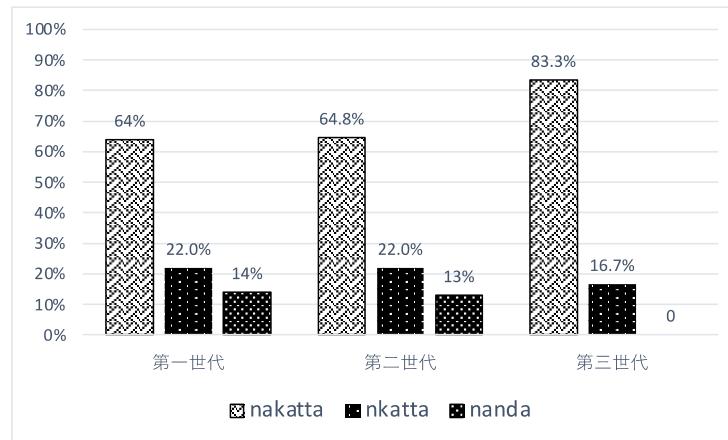


図7 否定辞<過去>における各世代の方言形・非方言形使用率

図6と図7を見ると、方言形の使用率は<非過去>の方が、<過去>よりも高いことが言える。<非過去>では、方言形「ン」の使用が目につく。特に一世の間ではこの使用率は46%と高くなっている。この方言形は第三世代においても3割ほどの資料率を示している。なお、本発表で扱った資料では「ヘン」の使用は認められなかった。

次に、<過去>では、<非過去>と比べて方言形率が低いが、美濃方言における否定の<過去>を表す「ナンダ」の使用が第一世代、第二世代に共通して認められたことは注目に値す

る。その率は決して高くはないが、かといって使用しなくなったわけではないことは興味深い。

(2) アスペクト

次にアスペクトの方言形、非方言形の使用率を示す（図 8）。

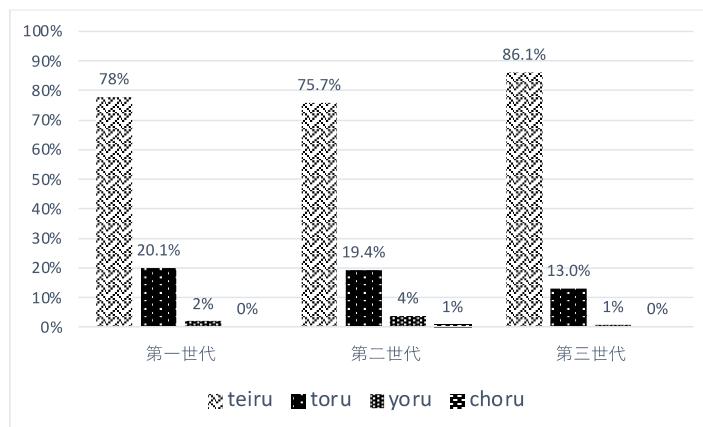


図 8 アスペクトにおける各世代の方言形・非方言形使用率

図 8 からアスペクトにおいては、非方言形の「テイル」が第一世代からすでに広く使われており、その傾向は第三世代において顕著になることがわかる。方言形は「ヨル」や「チヨル」の使用が認められる一方で、「トル」が優勢である。ただし、否定辞の方言形「ン」を見るような、高い使用率ではなく、第一世代、第二世代において 2 割ほどの使用率を示すにとどまっている。

5. まとめと今後の課題

本発表では、これまで整備してきた音声資料の書き起こし資料をもとに、北見市常呂町岐阜方言話者を三つの世代に分けて、それぞれにおいて観察される言語使用の傾向を、二つの言語変数（否定辞・アスペクト）で見た。基本的には第一世代においてすでに方言形を使用することをやめ、非方言形を採用する傾向が認められた。第二世代、第三世代になるにつれ、この傾向（非方言形を採用する傾向）が強くなることも確認できた。その一方、言語変数によってその傾向異なることも示された。具体的には否定辞においては方言形「ン」の使用率が他の変異形よりも高かったことなどによって確認できた。

世代差、という点に絞ってみると、第一世代と第二世代と第三世代との間で差異が顕著になる傾向も見てとれた。これは学校教育をどの程度を受けているのか、といった点などにその理由を求めることができよう。

本発表の課題は、第四世代以降の言語使用にどのような傾向が得られるか、である。これは新型コロナウイルス感染症の流行により、戦後生まれの世代に対する調査が実現できていな

いことによる。その意味でも彼らを対象とした調査を実施し、北見市常呂町岐阜史における郷里方言の維持と変容についての全体像を捉えるようにしたい。これは今後の課題である。

参考文献

- 朝日祥之 (2021) 「北海道北見市常呂町岐阜方言」 小西いずみ・日高水穂 (編) 『全国方言文法辞典資料集 (7) 活用体系 (5)』 方言文法研究会
- Asahi, Yoshiyuki (2015) Interface between regional and social dialects in Hokkaido: The case of the small town of Tokoro. *Multilingual Perspectives in Geolinguistics*. pp.62-68.
- 北海道教育大学旭川分校国語学ゼミナール (1980) 『ことのは 常呂町言語調査報告』 18 号
北海道教育大学旭川分校
- 林不二夫 (編) (2002) 『常呂町の昔話 2』 常呂町郷土研究同好会

¹ 本発表は、科学研究費補助金 (15K02586、19K00639) を受けて実施した調査研究の一部である。